

【共同研究】

## 『感情イメージ調査』についての研究 —年代を経た大学生においてみられた感情イメージ構造の安定性—

鈴木 賢男\* 大石 昂\*\* 松野 真\*\*\* 堀内 正彦\*\*\*\*  
鈴木 国威\*\*\*\*\* 藤森 進\*\*\*\*\* 岡田 斉\*\*\*\*\*

### Research on the Questionnaire on Affective Imagery (QAI): Stability among the Structure of Affective Imagery in Current College Students and Former One

Masao SUZUKI, Takashi OHISHI, Makoto MATSUNO, Masahiko HORIUCHI  
Kunitake SUZUKI, Susumu FUJIMORI, Hitoshi OKADA

This is a follow-up study on a special questionnaire named the Questionnaire on affective imagery (QAI) that was used in preceding studies by Takashi Uesugi over 26 years at Bunkyo University.

The QAI is a list of paired words with a rating scale. The left word of each pair is an “object word” (32) like self, father, mother, family, or social. The right is an “affective word” (8) like joy, hope, love, astonishment, sorrow, fear, anger, or disgust. Uesugi wrote six research papers describing successive studies on his original questionnaire (Uesugi, T., 1981, 1982, 1983, 1989, 1998, 2000). However, Uesugi passed away in 2005 without fulfilling his goal of putting the QAI into practice. Thus, we will study the composition of affective imagery and put the QAI to practical use. First, we will study the consistency of the composition of Affective Imagery over time.

Subjects were 47 male and 77 female students at Bunkyo University. Results first suggested that 8 affective images can be classified into three categories; plus or positive, neutral, and minus or negative. Like before, “astonishment” is understood to be a neutral emotion but may be a positive or negative feeling, sometimes changing from positive to negative or vice versa in the subjects in this study. Second, a parameter termed “affective value” was calculated on the basis of factor analysis. The result generally agreed with the previous study.

Results confirmed that the devised questionnaire is a useful instrument and that the calculated “affective value” is a useful measure to ascertain levels of positive or negative feelings despite the substantial passage of time.

---

\* すずき まさお 文教大学人間科学部非常勤講師  
\*\* おおいし たかし 富山大学  
\*\*\* まつの まこと 千葉県男女共同参画課  
\*\*\*\* ほりうち まさひこ 駒澤大学  
\*\*\*\*\* すずき くにたけ 東京都立大学理学研究科  
\*\*\*\*\* ふじもり すすむ 文教大学人間科学部心理学科  
\*\*\*\*\* おかだ ひとし 文教大学人間科学部臨床心理学科

## はじめに

本研究は、1981年から2000年まで、故 上杉喬先生（文教大学）によって、継続的に取り組まれた『感情イメージの研究』を省察し、独自に開発された「感情イメージ調査法」によって得られる知見の普遍性と特異性、また、技法としての適用性について、その確証をより得ること、並びに時代や環境の変化に柔軟に対応できるような技法上の改良を目指すための一環として計画された。

「感情イメージ調査法」の特徴は、対象を指示する語（対象語）を提示して対象をイメージさせ、同時に感情語を提示して、感情語によって想起された「感情イメージ」と、直観的に「ぴったり」であるかどうかを、<近い—遠い>の次元で評定する手続きをとる点にあり、そのことによって被験者が、対象の全般的なイメージと要素的感情語（例：喜・悲）と結びつけられた対象のイメージとを内的に照合するという過程を、論理的に仮定しうるところである。

感情イメージとは、「現前する対象や事象などにより直接に喚起された感情とは異なり、対象語として指示された対象に対するさまざまな過去体験とさまざまな知識との照合（記憶され思考作用を受けて保持されているイメージ）として成立している」と上杉（2000）は述べている。その意味において、少なくとも、感情的出来事による生理的变化のフィードバック、あるいは、それについての内的状態のイメージとは異なるものであること、ましてや、諸対象の概念的意味を象徴するのみの知的なイメージとは異なるのであって、上杉によって命名された「感情イメージ」が、対象と関わることによってもたらされる個人的意味や、それに関わった体験から得た対象への思い、それによって作用を受けたイメージであることを、うかがい知ることができる。

この「感情イメージ」についての上杉による第1報（1981）では、30ある対象の区別をしないで、全体としての8感情語についての因子分析をまず行い、その結果確認された主因子解第1因子負荷量の両極性（プラス—マイナス）が、異なった被

験者で実施された先行研究（上杉，1979）のものとは一致していたこと、さらに、その値が近似していることから、感情イメージにおける要素的感情の連関性、すなわち感情イメージの構造としてとらえられるものが、全般的には同世代対象者（大学生）間で安定していることを明らかにした。しかしながら、その反面では、対象語によって、その連関の仕方に違いがあることも見出すこととなった。

また、因子負荷量の値を各要素的感情への重みづけとして用いて、対象に対する8感情を統合した合成得点を算出し、その対象に対する感情イメージのポジティブ度を表わすとする「感情価」を得ることで、その大きさを、対象間で相対的に比較しうるものとした。そして、この対象ごとの感情価を用いて、30対象の連関性が因子分析によって集約され、対象者を取り巻く諸対象が、性質の異なる一定の因子（愛情関係／仕事・職場関係など）に区分されること、更に、その因子間に相関的あるいは因果的な関係があることも見出し、ある因子に関する感情イメージの変容が、別因子の感情イメージの変容に作用するものとなる可能性があることも、示唆するところとなった。

続く、第2報（1982）、第3報（1983）では、対象者を社会人に替え、第4報（1989）では、1982～1989年までの8年間にわたる大学生954名の多数の対象者に対して、感情イメージ構造の安定性を認めたこと、また、対象語別、男女別による感情イメージ構造の差異に着目することで、感情価を算出する際の、重みづけを、それに応じて変更することの必要性を明らかにするものとなった。第6報（2000）では、これを受けて、対象語ごとの重みづけを用いた感情価によって、感情イメージの持つ意味を人格テストとしてのTPIとの関係で明らかにすることを試み、第1に、諸対象（特に、社会関係に関する対象）に対する感情イメージが行動特徴としてのさまざまなパーソナリティ特性と関連していること。第2に、その関連が、対象の種類によって一様ではなく、特定の対象の感情イメージが特定のパーソナリティ特性と関連していること。第3に、TPI診断尺度の中で、強迫神経症（Ob）、妄想型分裂病（Pa）、

破瓜型分裂病 (Hb)、反社会性精神病質 (As) の4尺度が、32の全対象と、ほとんど無相関を示したことが示された。これにより、感情イメージ調査が、他の心理テストが示す特定の検査内容と、特異的に関連する可能性が示唆され、自身のテスト化への発展の可能性をも、次なる課題として取り上げられることとなった。「感情イメージの研究」は、以上をもって、最期の論文となってしまった。

## 方法

### 1. イメージ調査法

イメージ調査法では、上杉 (1979) によって開発された独自の調査用紙 (イメージ調査票) が用いられた。この調査票は、感情研究としてのSD法と、創造性開発技法としてのKJ法 (川喜多次郎, 1965) からヒントを得ているものであり (上杉1981)、対象語 (ex.私、父、母など) と感情語 (ex.喜、愛、悲など) を対にして示し、対象語の具体

的内容 (すなわち、各人の体験の中にイメージとして存在している内容) としての「対象」をイメージさせ、その「対象」のイメージと、感情語からイメージされる感情イメージの<近さ-遠さ>を、5段階で主観的に評定してもらうものである。

本研究では、比較検討する目的の上で、この上杉による感情イメージ調査票の仕様を変更せず、一連の研究 (1979,1981,1982,1989,2000) の手続きで示された内容に基づいて、そのまま、再現することにした (なお、上杉の手による調査票 (オリジナル原版) 自体は手元に残されていない)。採用した対象語は、上杉 (1989, 2000) と同じもので、学生を取り巻く諸対象を表わす32語、感情語については、全研究で一貫して用いられた漢字一文字による8語を用いた (Table 1)。この感情語の元は、水島恵一 (1979, 1980, 1981) によるカード式投影法 (図式的投影法) の感情カードで使われていたものである。対象語と感情語の対は256対となるが、その一部を、Table 2に表した。

### 2. 対象者

対象者は、文系のX大学大学生であり、男子47名、女子77名、計124名であった。平均年齢は、18.6才 (SD=0.82) となっており、そのほとんどが学部1年生であった。

### 3. 手続き

調査実施時期は、2008年7月28日と、同年9月24日であった。前者は、春学期定期試験後に、後者は、秋学期オリエンテーション時に、それぞれ、別々のクラス内で、調査票を一斉に配布し、その場で回答してもらった後、即、回収をした。調査用紙に記載された教示は次の通りである。

次のページから、全部で4ページにわたって、1~256のことばの対があります。左側はいろいろな対象や事象をあらわしていることばです。右側のことばは、感情語です。

各対について、左側の対象や事象を具体的にイメージしたとき、あなたにとって右側の感情が「近いもの」であるか、「遠いもの」であるか、そのぴたりするところに、○印をつけて下さい。

Table 1. 感情語と対象語

【感情語】 8							
喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
【対象語】 32							
私	父	母	夫	妻	兄弟	姉妹	恋人
友人	仲間	家族	家庭	親類	近隣	学校	集団
職場	社会	仕事	勉強	生活	遊び	趣味	旅
健康	病気	生	死	文化	芸術	人類	自然

Table 2. イメージ調査票(その一部)

			近い	やや近い	えどなちいらともい	やや遠い	遠い
1. 私	—	嫌					
2. 芸術	—	恐					
3. 死	—	驚					
4. 父	—	愛					

## 研究 I 感情イメージ構造の因子的普遍性

### 1. 目的

上杉(1981,1982,1983,1989)は、対象を区別しない、全対象に対する感情イメージ構造の安定が明らかにされたとするが、1981年では、それに先行する1979年との比較的近い同世代大学生間での比較を通してであり、1982、1983年では、対象者の属性をほぼ同時期の社会人に変えた場合におけるものであった。1989年では、1982～1989までの8年間の大学生(1000名に近い対象者)に対して分析を行って、同様な構造をもつことを確認しているものの、8年間の年代間比較はなされていない。そこで本研究では、諸対象に共通する一般的な感情構造を、同一の基準にそった因子分析によってもとめ、おおよそ20年を経た、経年間で共通点と相違点を明らかにすることで、感情構造の普遍的な側面を検討することとした。

### 2. 分析

諸対象に共通する一般的な感情構造をもとめるために、8感情(8変数)を“列”とし、対象32×調査対象者124=3,960件を“行”とするマトリックスを構成し、8感情間での相関行列を得ることで、因子分析を行った。固有値1.0以上を基準とした主因子法による2因子を抽出し、その後、回転バリマックス解を得た。累積寄与率は、50.1%であった。

### 3. 結果

(1) 因子分析の結果を、上杉(1981,1989)のものとともにTable 3に示した。2008年の本研究において、抽出された主因子解の第1因子負荷量は、正負の符号(+と-)双方が認められ、この因子が両極的な軸を示す構造をもち、一側に、感情語の「喜(-.69)」「望(-.56)」「愛(-.49)」、+側に「嫌(.74)」「悲(.68)」「恐(.65)」「怒(.44)」、そして、ほぼ0に近いものとして「驚(.02)」となっていることがわかった。また、第2因子負荷量は、

「驚(.52)」を筆頭に、同符号の一極的な軸を示しており、「望(.52)」「喜(.50)」「恐(.41)」「怒(.38)」「愛(.35)」「悲(.33)」「嫌(.19)」と続いていることがわかった。

これを、同じく大学生を調査対象者とした上杉(1981,1989)のものと比較してみると、第1因子負荷量では、いずれの年代も、一側に「喜」「望」「愛」、+側に「嫌」「悲」「恐」「怒」となっており、中間に位置する「驚」も含めて、双方の負荷量の大きさによる順位も、保持されていることがわかった(「悲」と「恐」はほぼ同順位)。しかし、同一の感情に対して、負荷量の年代間での差を算出してみたところ、1981年と1989年の間では、差の絶対値は、ほとんど.00～.03程度(「愛」のみ比較的大きい:.07)に収まるのに対し、本研究(2008年)との差では、「驚」と「怒」に.10～.20の比較的大きい差を認めることとなった。第2因子負荷量においては、「驚」が筆頭であること、「嫌」が最下端であることをはじめとして、ほぼ同様な順位を保っていたことがわかった。

Table 3. 調査実施年別の全対象に対する因子負荷量

発表年 対象年度 (対象者)	2008年 2008単年度 (大学生124名)		1981年 1981単年度 (大学生127名)		1989年 1982-1989統合 (大学生954名)	
	F1	F2	F1	F2	F1	F2
主因子解						
1.喜	-0.69	0.50	-0.80	0.35	-0.76	-0.42
2.望	-0.56	0.52	-0.67	0.40	-0.67	0.49
3.愛	-0.49	0.35	-0.56	0.33	-0.63	0.41
4.驚	0.02	0.52	0.16	0.44	0.16	0.73
5.悲	0.68	0.33	0.66	0.29	0.70	0.35
6.恐	0.65	0.41	0.67	0.36	0.70	0.42
7.怒	0.44	0.38	0.60	0.31	0.63	0.42
8.嫌	0.74	0.19	0.79	0.06	0.82	0.00
Varimax解						
1.喜	-0.20	0.83	0.84	-0.22	0.85	-0.19
2.望	-0.10	0.75	0.77	-0.11	0.83	-0.08
3.愛	-0.15	0.59	0.65	-0.10	0.74	-0.11
4.驚	0.35	0.39	0.15	0.45	0.36	0.65
5.悲	0.73	-0.18	-0.32	0.64	-0.30	0.73
6.恐	0.76	-0.10	-0.29	0.70	-0.25	0.78
7.怒	0.58	0.01	-0.27	0.62	-0.20	0.73
8.嫌	0.69	-0.33	-0.58	0.54	-0.61	0.54

(2) 一方、回転バリマックス解では、一方の因子で、負荷量の値が正の同符号となっているものが「恐」「悲」「怒」「嫌」で、絶対値は.60～.70程度あり、負の同符号となっている「喜」「愛」「望」では、絶対値が.10～.20程度となっていた。「驚」は、正符号であるが、絶対値は比較的小さく.35であった。もう一方の因子においては、「喜」「望」「愛」が正の同符号で、絶対値が.60～.80程度であり、負の同符号は「恐」「悲」「嫌」で、絶対値は.00～.30程度であった。前者の因子では、「悲」「怒」「嫌」と同符号であった「怒」は、後者の因子では反対の符号に転じてしまっているものの.01で、正負というよりは0に近いものとして認められた。「驚」は、正符号で前者同様の大き

きをもつ.39であった。

これを、上杉（1981,1989）による因子負荷量とともに、回転解の二つの軸にプロットしてみたものが、Figure 1である。これによると、「喜」「望」「愛」は第4象限、「嫌」「恐」「悲」「怒」（但、2008年の怒を除く）は第2象限、「驚」が第1象限に、いずれの場合もプロットされることが認められた。しかしながら、それぞれの感情で、年代間での変動を比較的大きく示しているのが、「驚」であること、本年のみに認められる変動としては、「嫌」「恐」「悲」の全体が水平軸で0に近づいていること、「怒」では、更に、ほとんど0になって、垂直軸上にプロットされていたことがわかった。



Figure 1. 感情語の因子負荷量のVarimax解プロット



#### 4. 考察

(1) 感情イメージの構造としては、本研究における主因子解および回転バリマックス解の結果から、8つの感情を、a.「喜」「望」「愛」、b.「驚」、c.「悲」「恐」「怒」「嫌」の3つのグループにまとめることができた。これらのグループは、主因子解第1因子が両極性（+と-）を表わす軸として抽出されたことから、a.とc.は逆方向を示す感情であり、同方向を示す感情の内容から、a.をプラス感情、c.をマイナス感情と名付けることが可能であると考えることができた。また、c.は、両極性の軸で言えば、0値に近く、その意味では、中性感情とも呼ぶべきものと思われるが、バリマックス解における単純構造では、プラス感情群とマイナス感情群と思われるそれぞれの因子に、一定程度の負荷量を有することから、実質的には、両方の方向に変動可能な流動性のある感情、もしくは、両方向の側面をもつ感情にとらえた方が、妥当であると思われる。

(2) 結果(1)による3グループが上杉(1981,1989)によるものと同じであり、主因子解第1因子による各感情の負荷量の大きさと感情間での相対的順位（負荷量の大きさの順番）が、20年後に調べられた本研究においても保たれており、かなりの程度安定していることから、感情イメージ構造の普遍性は、十分に考えるものとして結論づけることができた。しかしながら、「驚」や「怒」は、負荷量の値が年代によって比較的変動しており、全般として両極構造の普遍性を保ちながらも、一部の感情の性質が相対的に変容している可能性のあることも示唆された。特に、「驚」は対象者が異なるだけでも、変動する特異な感情であることが、回転バリマックス解のプロットにより明らかとなった。

### 研究Ⅱ 「感情価」を指標とする 対象構造の恒常性

#### 1. 目的

主因子解第1因子の負荷量を重みづけとした8感情の合成得点を「感情価」と定義した上杉は、対象ごとに算出されるその「感情価」を用い

て、感情的側面から見た場合における諸対象の構造を、因子分析的に明らかにしてみせた（上杉 1981,1982,1983）。その中で、学生を対象にした上杉（1981）によるものをみても、大学生を取り巻く諸対象の連関を集約した結果とする7因子を抽出し、回転バリマックス解における単純解の中で、“生活・社会”（10対象：生活・社会・生・人類・私・学校・近隣・仲間・勉強・友人）の因子が、他の主要な因子（“家族”“遊び”“愛情をもつペア”“仕事”）との相関を、比較的強くもつことから（.70以上）、この因子が対象構造全体の中心的な位置を占めることが示唆されていた。相関の強い4因子を含む他6因子の構成は、“家族”（父・母・家族・家庭・兄弟・姉妹）、“遊び”（親類・遊び・芸術・趣味）、“健康”（健康・病気・死）、“愛情をもつペア”（恋人・夫・妻）、“自然”（旅・自然）、“仕事”（仕事・職場）であった。そこで本研究では、上杉（1989）で必要性が説かれながらも実施には至らなかった、対象別かつ男女別による重みづけを用いた「感情価」をもとめ、因子分析によって、感情価を指標とした対象の構造的類似性を年代間で比較し、その恒常性を検討することとした。

#### 2. 分析

(1) 32対象語ごとに、8感情（8変数）を“列”として、男性で47件、女性で77件を“行”とするマトリックスとなるようにデータを構成し、8感情間での相関行列を得ることで、固有値1.0以上を基準とした因子分析を行い、男女別でなおかつ対象語ごとの8感情についての主因子解をもとめた。累積寄与率は、35.9%（女性の「病気」）～65.3%（男性の「夫」）の範囲内であった。

(2) 主因子解で正負両極の構造が見られる因子（多くは第1因子）の因子負荷量を重みづけとして、8感情の合成得点としての「感情価」 $T_{ij}$ を求めた。 $T_{ij}$ は対象 $j$ に対する調査対象者 $i$ の感情価で、

$$T_{ij} = (\sum W_{jk} \times t_{ijk}) \div \sum |W_{jk}| \times 10$$

として定義される。ここで、 $W_{jk}$ は対象 $j$ に対する感情 $k$ の重みづけであり、男女別にもとめられ

た32対象語の8感情についてのそれぞれの因子負荷量を意味している。因子負荷量を利用した実際の重みづけは、Appendix 1に示した。tijkは調査対象者が対象jをイメージして、感情kとの<近さ-遠さ>を評定した評定点で、「近い」=+2点、「やや近い」=+1点、「どちらともいえない」=0点、「やや遠い」=-1点、「遠い」=-2点として数量化したものである。これにより、理論値としての「感情価」は+20~-20に分布した。

(3) 対象ごとにもとめられた「感情価」によって、32対象間の相関行列を得ることで、主因子法による因子分析を行い、固有値1.0以上を基準として、6因子を抽出したのち、回転バリマックス解を得た。累積寄与率は65.8%であった。因子数を4.5,7と固定した場合の解とも比較したが、固有値基準の6因子が、最も解釈の容易なものであったので、6因子を結果として採用した。

(4) 各因子に含まれる対象の感情価を合計し、因子間のピアソンの積率相関係数を求め、一定以上(.70)の値を基準として、他の因子と比較的多く関連する因子を中心においた構造を検討した。

### 3. 結果

(1) 32対象語ごとの感情価の平均値と標準偏差をTable 4.の右側に示すとともに、対象別の重みづけが用いられた最初で最後の上杉(2000)によるものを列記した。感情価の大きさは、+20に近づけば調査対象者の諸対象に対する全体としてのプラス感情が強くと、-20に近づけば、その対象に対するマイナス感情が強いことを示す。

強いプラス感情としてイメージされている対象は、「趣味(13.6)」を筆頭に、「遊び」「友人」「旅」「仲間」「家庭」「家族」「恋人」(10.0以上)であった。反対に強いマイナス感情としてイメージされているものは、「病気(-13.0)」「死(-10.3)」であった。更に、感情価が0に近い値を示したものとしては、「勉強(0.6)」「社会(1.4)」「近隣(1.7)」の3対象であった。これらは、0に近い値を中心として、標準偏差の値で7.00~8.00を示しており、プラス感情のイメージをもつ者とマイナス感情のイメージをもつ者とが対称的に2分される傾向にあ

ることが認められた。それよりもやや穏やかではあるが、「集団(4.6)」「職場(4.8)」「仕事(3.1)」「私(3.2)」も類似した特徴をもつことがわかった。

対象別のみの重みづけを用いた上杉(2000)による感情価の平均値と比較してみると、2000年では強いプラス感情としてイメージされていることが認められた「健康(13.5)」のみが2008年では、高い位置から相対的に脱落していることが認められたが(7.3)、その他「趣味」をはじめとする強いプラスイメージの対象は、2000年のものと同じであり、本研究においても、値の大きさ、相対的順位ともに、保たれていることがわかった(9項目中8項目)。また、強いマイナス感情は、各年とも同様に「病気」「死」となっていることもわかった。

しかしながら、同一対象に対する2000年と2008年の平均値の差に対して、検定を行ったところ、32対象語中8対象に、最低でも5%水準で有意な差を認めることとなった。これによると、2008年のほうで感情価平均値が比較的低くなったものは、「仕事」「近隣」「病気」「健康」「妻」「母」であり、反対に高くなったものは、「集団」「父」「親類」「文化」となっていることがわかった。

(2) Table 4の左側では、感情価を指標とする32対象の回転バリマックス解における因子負荷量を示した。

第1因子として分類されたものは、「集団」「社会」「人類」「職場」「自然」「学校」「生」「仕事」「仲間」「私」「近隣」の11対象から構成されるもので、社会的に自分を律するための基準となるような「規範的对象」と呼べるものであった、第2因子は、「夫」「父」「親類」「妻」「家族」「家庭」「恋人」「死(逆転)」の8対象からなるもので、絆を作るために奉仕によって支えられる「献身的対象」と呼べるものであった。第3因子は、「趣味」「遊び」「芸術」「生活」「病気(逆転)」「旅」「友人」「文化」の8対象からなり、好奇心をもって積極的になっていくことを必要とする「探索的对象」、第4因子は、「兄弟」「母」「姉妹」の3対象で、家族の中でも密着度が高く、良くも悪くも情愛深い関係たりうる「情愛的対象」と命名することとした。第5因子と

Table 4. 32対象語の感情価と因子負荷量

対象語	因子負荷量 (Varimax解)						感情価				
							2008(N=124)		2000(N=154)		
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	平均	SD	平均	SD	
集団	.80	.19	.15	.25	.21	-.05	4.6	8.32	1.4	7.90	**
社会	.80	.21	.11	-.01	.02	.06	1.4	7.85	0.1	7.68	
人類	.71	.16	.28	.14	.13	.00	5.8	8.36	4.7	7.97	
職場	.70	.26	.13	.10	-.36	.05	4.8	8.56	4.3	7.56	
自然	.63	.23	.27	.10	-.03	.14	7.1	6.68	7.7	5.81	
学校	.60	.10	.22	.43	.22	.19	6.7	7.60	5.6	6.90	
生	.56	.18	.45	.22	.35	-.05	8.1	8.43	9.2	6.60	
仕事	.56	.18	.27	.28	-.04	.24	3.1	6.61	5.2	7.08	*
仲間	.51	.27	.40	.23	.45	-.19	11.1	6.75	10.3	6.55	
私	.48	.40	.01	.09	.43	.04	3.8	8.16	3.2	7.28	
近隣	.48	.35	.12	.22	.19	.24	1.7	6.88	5.6	6.90	***
夫	.23	.79	.25	.03	-.05	.11	9.3	6.65	9.3	6.52	
父	.22	.72	.22	.17	.03	.15	6.5	7.32	3.9	7.82	**
親類	.23	.68	.16	.05	.26	-.02	8.1	7.67	5.6	6.79	**
妻	.13	.63	.12	.32	.14	.11	6.8	6.19	9.9	6.67	***
家族	.20	.63	.24	.49	.23	-.08	10.7	7.88	10.9	7.70	
家庭	.30	.59	.28	.44	.23	-.19	10.9	7.08	10.9	6.83	
恋人	.41	.49	.28	.18	.10	-.19	10.7	6.62	10.5	6.16	
死	-.26	-.35	-.35	.02	-.32	.33	-10.3	7.94	-8.7	8.18	
趣味	.18	.28	.67	.24	.12	-.08	13.6	5.88	12.7	5.97	
遊び	.37	.14	.66	.11	.12	-.03	12.7	5.25	12.1	6.22	
芸術	.30	.28	.58	.16	.11	.13	9.1	6.47	9.9	6.10	
生活	.44	.17	.54	.43	.28	.12	7.0	7.00	7.2	6.53	
病気	.05	-.15	-.54	-.32	-.24	.36	-13.0	6.73	-9.9	6.29	***
旅	.41	.41	.51	.26	-.05	.06	11.2	6.19	11.3	5.94	
友人	.50	.28	.50	.26	.44	-.06	11.5	5.95	10.4	6.35	
文化	.19	.43	.45	.12	.19	.18	8.4	5.93	6.4	7.32	*
兄弟	.26	.21	.34	.70	-.01	-.03	8.6	6.13	9.4	6.30	
母	.24	.49	.16	.55	.24	.13	7.8	6.32	9.7	6.41	*
姉妹	.27	.31	.45	.53	.01	.02	8.6	6.91	9.1	6.46	
健康	-.06	.23	.32	.10	.80	.17	7.3	6.77	13.5	5.27	***
勉強	.15	.14	-.01	.02	.09	.58	0.6	7.00	0.8	7.71	

注) \*\*\*は0.1%, \*\*は1%, \*は5%水準で有意な差を示したことを示す

第6因子は、それぞれ1対象であるが、第5因子とされた「健康」は、「友人・仲間・私・生」の因子負荷量も一定程度高い(0.40程度)ことから、生き生きした状態にらしめる“親和的对象”、第6因子とされた「勉強」は、同様に、負荷量のある程度高い「病気・死」(0.30程度)を考慮に入れて、自分を苦しめるものとなる“抑圧的对象”とした。

これを上杉(1981)による30対象(本研究では、1989, 2000にならい32対象:「文化」「集

団」が追加されている)の因子構造と比較してみると、上杉(1981)で構造の中心とされた“社会・生活”の因子と共通すると思われる“規範的对象”因子では、“社会・生活”の因子を構成する10対象(生活・社会・生・人類・私・学校・近隣・仲間・勉強・友人)のうちから、[勉強][友人][生活]がはずれていることが認められた。その反対に、上杉(1981)で“仕事”因子を構成した2対象(仕事・職場)が“規範的对象”因子として構成されていることがわかった。また、上杉(1981)で“趣味”



因子を構成する4対象（親類・遊び・芸術・趣味）のうちから、〔親類〕がはずれて、「生活」「旅」「友人」が入って“探索的对象”因子を構成することになった。

更に、上杉（1981）では、情愛深い関係を形成していたはずの“家族・家庭”因子は、本研究では、「父」「家族」「家庭」の属する“献身的対象”因子と「母」「兄弟」「姉妹」の属する“情愛的対象”因子とに2分された結果となり、上杉（1981）で“健康”を構成していた〔健康〕〔病気〕〔死〕が、本研究では、バラバラに他の因子として構成されることになった。

#### 4. 考察

（1）8感情の主因子解における因子負荷量を重みづけとして算出された「感情価」は、上杉（2000）では、対象別ではあるが男女混合の因子分析の主因子解、本研究では、対象別かつ男女別の因子分析の主因子解を利用するものであったものの、32対象における感情価の平均値は、10.0以上を示す強いプラス感情のイメージを示した対象内容と-10.0程度以下を示す強いマイナス感情のイメージを示した対象内容が、前者で1項目分が本研究で除かれたのみで、他の10対象（プラス感情イメージ：8対象、マイナス感情イメージ：2対象）全てが共通していたことがわかり、しかも値の大きさにも差がなかったものがほとんど全てであった（「病気」だけ有意差あり）。

このことは、感情イメージの構造を応用して定義された「感情価」で、絶対値が高い値を示すような、強い感情イメージをもちうる対象が、その対象との関わりに、年代的にも対象者間の間でも、不変の恒常的価値を見出しうるものとして、評価される可能性があることを示唆するものとなるであろう。また、そうであるならば、逆に、差を生じやすかったり、ある年代で差異をもたらしやすかったりする対象は、主体の体験や経験によって、あるいは、イメージの操作によって、対象との関係が変わっていきやすく、比較的変異を起ししやすい対象として評価されることも、考えられうるものと思われる。

（2）感情価を指標とした32対象の因子分析で得

られた対象の構造では、同一因子に含まれる対象が、上杉（1981）のもの、ある程度類似したものであることが確認された。両者とも、「私」や「社会」「仲間」「学校」「近隣」「人類」は、特定の因子として構成されており、年代間で、一定程度の共通した意味合いをもつ対象として考えてよいであろう。上杉（1981）は、これを含む因子を、対象構造の中心に位置することを示唆したが、ここに共通の部分として見出された対象は、言わば、中心中の中心とも言えるものなのかもしれない。

しかし反面、興味深いことでもある点は、上杉（1981）で、この因子の構成要素として分類された〔勉強〕は、本研究では、どこにも属さない独自の対象として抜け出してしまったが、すでに、上杉（2000）において、同じ現象が確認されていたことである。勉強に対する感情イメージの別因子としての構成は、勉強が、社会に関わることに関係する価値をもつ対象ではなくなりつつあることを、そして、なくなってしまっていくことを、体験として得、記憶に残していつてしまったことを受けての結果なのではないかと、推量させるものであった。

また、これに限らず、上杉の一連の論文内では、比較的安定して抽出されていた家族関係の因子が分断されて、「父」と「母」が別因子を構成することになったり、「病気」や「死」、「健康」が1つの因子を構成する内容としてまとまらなかつたりするなど、比較的大きな相違点も表わすこととなった。これは、上杉（2000）でも確認されていない。感情イメージを指標とした対象の構造は、20年を経て、中核を残しながらも、それに関連する他の因子の構成、更には、特定の対象に対する感情イメージの質が変わったことを考えさせるものとなった。

### 研究Ⅲ 感情価と他の心理評定との関連性

#### 1. 目的

対象ごとに算出される「感情価」、および、それに基づく因子分析の結果としての構造とパーソ

ナリティテスト (TPI) で得られる診断尺度との間に、一定の関連性が認められた (上杉, 2000) ことは、感情イメージを反映した対象の構造において、内的な整合性のみではなく、その他のパーソナリティテスト、あるいは、それに限らない種々の心理尺度や評定との間に対しても、外的に整合性を持ちうる可能性のあることを示唆するものと考えられる。本研究では、調査規模の制約もあり、多項目からなる標準化された尺度を、同一の調査対象者から得ることに無理があったため、数少ない項目ではあるが、人 (組織) に対してもっている信頼感の程度に関して、独自に項目を作成し、それに対して得られた評定値との関連性を検討することにした。

## 2. 分析

(1) 種々の人 (組織) に対する信頼感の強さを測定するものとした「1.自分で自分に対して信頼をしている」「2.家族というものを信頼している」「3.友人というものを信頼している」「4.教育機関 (学校一般) のことを信頼している」「5.世間一般のほとんどの人のことを信頼している」の5項目に対して、全くそう思う～全く思わないまでを7段階で評定してもらった。

(2) 上記5項目間において、ピアソンの積率相関係数を算出し、一定の基準を定めて、信頼感の強さの程度について、相関が強い項目が何であるのかを見出した。更に、研究Ⅱで、32対象ごとの感情価を用いて導き出された6因子について、同一因子として構成されている対象の感情価合計得点と、信頼5項目との相関係数を算出し、相関の強い関係が何であるのかを検討した。

## 3. 結果

(1) 信頼5項目の平均値は、高かったものから、「2.家族を信頼 (5.5)」「3.友人を信頼 (5.5)」「1.自分を信頼 (4.4)」「4.学校を信頼 (4.0)」「5.他者を信頼 (3.1)」となることが認められ、家族や友人などと比べると、他者に対しては、2点ほどの信頼感の差があること、中位点が4であることから、他者に対しては、どちらかといえば、信頼をもちたいものとして意識していることがわ

かった。また、5項目間の相関係数で、5%水準で有意であり、なおかつ $r = .40$ 以上を基準として一定以上高かった関連をみると、「2.家族を信頼」と「3.友人を信頼」(.46)、「3.友人を信頼」と「4.学校を信頼」(.50)、「3.友人を信頼」と「5.他者を信頼」(.44)、「4.学校を信頼」と「5.他者を信頼」(.64)の4つとなっており、「1.自分を信頼」はいずれの項目とも相関係数が低く (.25程度以下)、また、「2.家族を信頼」と「5.他者を信頼」(.15)に関しては、すべての組合せで、最も低い相関係数を示すことが認められた。

(2) この信頼に関する項目の評定と、感情価を用いた対象の因子内合計得点との相関係数が、5%水準で有意であり、なおかつ $r = .40$ 以上で、一定以上高かった関連を基準としてみると、「親和的对象 (「健康」) 」と「抑圧的对象 (「勉強」) 」の因子は、どの信頼項目とも関連が認められないことが、まず確認された。この2項目を除く、4因子内で、全ての因子と関連したのは「2.家族を信頼」であり、「規範的对象」(.41)、「探索的对象」(.58)、「献身的対象」(.45)、「情愛的対象」(.61)と正の比較的強い相関を示した。「3.友人を信頼」では、「探索」との関連が見られなかったが、「規範」(.49)、「献身」(.49)、「情愛」(.42)の3つに関連を認め、「4.学校を信頼」では、「探索」の他、更に「情愛」と関連が見られず、「規範」(.43)、「献身」(.41)との2項目とに関連があることがわかった。最後の「5.他者を信頼」では、「規範」(.40)のみとの正の相関を示すことが明らかとなった (Table 5)。

Table 5 32対象語の6因子と信頼5項目との相関係数

信頼	32対象語の因子					
	規範	探索	献身	情愛	親和	抑圧
自分	.34	.14	.18	.21	.18	.02
家族	.41	.58	.45	.61	.28	.07
友人	.49	.36	.49	.42	.26	.02
学校	.43	.33	.41	.38	.39	.33
他者	.40	.22	.24	.26	.27	.10

## 4. 考察

(1) 信頼のおける対象として、大学生の中で最も高い値を示したのは、家族や友人であった。信

頼は、たとえ対象（人・組織）との明確な確約をとらなくても、対象に対する現段階での情報が不足して、不確定な状態であっても、その対象がもつ意図が、自身の期待を裏切らないであろうとする態度・意識であり、その意味では、感情イメージと同様に、様々な体験的過程の中で形成されていくものである。それは、漠然とした感じのものもあるだろうし、意識的にははっきりと強く感じられるものもあるであろう。この信頼において、他者への信頼が低いのは、他者との関係が、通常は意識されにくいもので、特に、自分に向けての意図や、対象（人・組織）が目的として持つ意図を考える必要がなく、関係がなかったり、薄かったりすると考えていることによるものなのであろう。コミット関係が取りにくいものには、信頼感が低くなるものと考えられる。

(2) この信頼感と、感情イメージを反映した対象の因子における感情価の合計得点との相関で、家族への信頼を感じることに、"規範的对象"や"探索的对象"、"献身的対象"、"情愛的対象"の相関係数が一定程度に高かったのは、家族のもつ意図が自身の期待を裏切らないと思えるものほど、"規範的对象"や"探索的对象"、"献身的対象"、"情愛的対象"に対するより強いプラス感情のイメージをもつということを示しており、しかも、"親愛"や"抑圧"を除いた4因子全てに関連をもつということから、恒常的にアプローチをする必要がある対象に、プラスの感情イメージを持つためには、家族に信頼が持てるようになることが大切で、身近にいる家族が、対象に対するプラス感情を比較的全般的に持っていくための原点、あるいは源泉となるものであることが予期できるものとなっ

Appendix 1. 対象語ごとの感情価の男女別重み付け(対象語との男女別主因子解より符号の方向を統一したもの)

対象	全体 (N=234)								男性(N=47)								女性 (N=77)							
	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
私	.47	.55	.40	-.04	-.72	-.68	-.49	-.71	.49	.69	.74	.33	-.40	.04	.10	-.06	.57	.64	.49	.07	-.73	-.70	-.52	-.82
父	.88	.45	.77	.04	-.33	-.12	-.14	-.40	.76	.26	.94	-.26	-.24	-.14	-.05	-.42	.22	.34	.22	-.27	-.72	-.50	-.76	-.70
母	.64	.53	.54	.22	-.24	-.34	-.46	-.59	.56	.69	.53	.14	-.20	-.42	-.58	-.51	.62	.44	.54	.21	-.28	-.34	-.50	-.65
夫	.62	.63	.61	.06	-.48	-.39	-.19	-.46	.48	.50	.50	-.16	-.49	-.39	-.42	-.35	.04	.08	.20	-.39	-.76	-.81	-.54	-.67
妻	.62	.39	.51	.08	-.49	-.38	-.34	-.47	.68	.65	.67	.10	-.22	-.18	-.13	-.33	.49	.29	.43	.10	-.50	-.51	-.46	-.46
兄弟	.72	.46	.64	.11	-.39	-.37	-.34	-.32	.40	.06	.48	-.42	-.48	-.68	-.65	-.44	.60	.55	.60	.13	-.40	-.38	-.37	-.43
姉妹	.47	.40	.55	-.21	-.62	-.61	-.61	-.77	.46	.51	.70	-.40	-.62	-.55	-.71	-.71	.59	.50	.54	.05	-.52	-.59	-.47	-.74
恋人	.67	.69	.51	.11	-.54	-.48	-.42	-.60	.85	.86	.53	.19	-.40	-.28	-.44	-.53	.29	.37	.45	-.15	-.77	-.76	-.52	-.66
友人	.65	.55	.60	.01	-.41	-.53	-.46	-.64	.71	.71	.61	-.10	-.42	-.38	-.36	-.57	.63	.56	.60	.07	-.41	-.57	-.46	-.64
仲間	.61	.42	.53	-.02	-.67	-.59	-.58	-.71	.71	.55	.45	.04	-.45	-.25	-.48	-.72	.59	.39	.60	-.04	-.76	-.78	-.58	-.78
家族	.50	.53	.71	.11	-.56	-.77	-.69	-.93	.59	.62	.79	.22	-.34	-.79	-.84	-.94	.44	.48	.69	.05	-.70	-.76	-.60	-.91
家庭	.61	.45	.53	-.26	-.72	-.64	-.59	-.75	.71	.63	.65	-.38	-.61	-.85	-.39	-.54	.53	.32	.46	-.22	-.82	-.56	-.76	-.83
親類	.17	.16	.35	-.39	-.73	-.81	-.66	-.68	.21	.75	.74	.01	-.11	.04	-.19	-.12	.14	.14	.30	-.47	-.78	-.79	-.69	-.61
近隣	-.04	-.14	.08	-.27	-.71	-.65	-.66	-.83	.65	.56	.36	.10	-.28	-.26	-.10	-.43	.65	.53	.69	.36	-.39	-.56	-.40	-.73
学校	.69	.47	.53	.10	-.68	-.66	-.66	-.71	.64	.43	.43	-.02	-.86	-.50	-.65	-.69	.71	.51	.56	.18	-.66	-.74	-.69	-.70
集団	.43	.62	.37	-.13	-.76	-.74	-.54	-.76	.65	.59	.51	-.15	-.76	-.59	-.44	-.64	.34	.61	.31	-.13	-.83	-.80	-.60	-.81
職場	.05	.04	-.05	-.35	-.74	-.77	-.76	-.68	.05	.04	-.05	-.35	-.74	-.77	-.76	-.68	.01	.06	.15	-.38	-.70	-.76	-.84	-.71
社会	.26	.34	.33	-.05	-.66	-.75	-.58	-.79	.41	.56	.37	.21	-.49	-.48	-.42	-.61	.34	.39	.45	-.05	-.67	-.79	-.62	-.83
仕事	.35	.36	.29	.07	-.47	-.56	-.59	-.58	.20	.23	.01	.06	-.79	-.32	-.65	-.53	.46	.48	.52	.21	-.31	-.58	-.40	-.56
勉強	.77	.58	.20	.22	-.45	-.40	-.46	-.47	.61	.49	.52	.06	-.17	-.42	-.21	-.38	.79	.67	.13	.34	-.55	-.39	-.55	-.57
生活	.68	.52	.35	.06	-.55	-.55	-.35	-.61	.60	.29	-.02	-.27	-.59	-.74	-.44	-.58	.81	.67	.67	.28	-.32	-.34	-.04	-.60
遊び	.35	.22	-.13	-.16	-.70	-.59	-.69	-.54	.43	.28	-.41	-.35	-.70	-.62	-.71	-.72	.35	.39	.06	.11	-.72	-.47	-.56	-.60
趣味	.37	.34	.41	-.08	-.82	-.56	-.70	-.69	.52	.19	.33	-.30	-.88	-.34	-.65	-.69	.29	.38	.45	.04	-.77	-.75	-.71	-.70
旅	.13	.14	-.12	-.15	-.58	-.72	-.65	-.52	.71	.56	-.07	.34	-.43	-.55	-.59	-.35	.27	.25	.06	.03	-.54	-.56	-.68	-.69
健康	.58	.41	.12	-.07	-.58	-.62	-.40	-.42	.64	.69	.44	.24	.22	-.09	.20	-.14	.78	.70	.54	.36	-.29	-.22	-.05	-.09
病気	.70	.69	.18	.12	-.55	-.40	.09	-.72	.77	.84	.38	.22	-.61	-.36	.10	-.76	.50	.44	.10	-.01	-.63	-.46	.00	-.75
生	.68	.56	.43	-.08	-.71	-.49	-.33	-.82	.69	.51	.19	-.21	-.58	-.56	-.47	-.80	.68	.56	.54	-.03	-.79	-.47	-.26	-.83
死	.61	.67	.51	-.12	-.64	-.57	-.20	-.53	.59	.52	.54	-.27	-.74	-.76	-.42	-.64	.70	.80	.60	.10	-.55	-.37	.06	-.34
文化	.49	.36	.34	-.02	-.60	-.42	-.61	-.44	.44	.41	.25	.09	-.65	-.39	-.55	-.36	.46	.36	.34	-.06	-.56	-.41	-.60	-.45
芸術	.43	.50	.48	.20	-.46	-.69	-.60	-.45	.45	.46	.46	.08	-.52	-.65	-.48	-.49	.37	.47	.43	.20	-.42	-.70	-.74	-.34
人類	.29	.38	.37	-.17	-.78	-.65	-.80	-.65	.11	.43	.13	-.44	-.85	-.64	-.80	-.67	.43	.41	.52	-.03	-.70	-.65	-.79	-.61
自然	.46	.27	.12	.11	-.47	-.46	-.59	-.54	.55	.13	-.07	.38	-.42	-.42	-.57	-.44	.26	.24	.17	-.13	-.56	-.61	-.61	-.53

た。

### 結び

本研究は、上杉喬先生による一連の「感情イメージの研究」に関して、同時代（1981～1989）で得られた感情イメージ構造の安定性が、年代を経た、およそ20年後の現代においても確認されるものかどうかを、各論的に研究するものであった。本研究のイメージ調査法によって得られた諸対象に対する感情語間の因子構造や、感情イメージの構造を応用した諸対象に対する「感情価」という指標、およびそれに基づく諸対象間の構造においても、多くの共通点を年代間で確認することができ、その構造や指標による数値が、安定しているものであることから、このイメージ調査法の有効性に関する確証をより得ることになった。

しかしながら、「感情価」、に基づいた諸対象間の構造に関して、共分散構造分析を用いた上での対象における因果論的モデルの妥当性や、「感情価」の重みづけとして用いられる因子負荷量を、対象別、性別に分ける必要性・実用性などの検証に関しては、今後の課題として残されるものとなった。

### 参考文献

- Cornelius, R.R. The Science of Emotion : Research and tradition in the psychology of emotions Prentice-Hall, Inc 1996
- Izard, C.E. 比較発達研究会訳 感情心理学 ナカニシヤ出版 1996
- Frijda, N.H. The Psychologist's Point of View. In Lewis, M., Haviland-Jones, J.M. (Eds.), *Handbook of Emotions : Second Edition*, New York : The Guilford Press, Pp.59-74 2004
- Plutchik, R. The multifactor-analytic theory of emotion *Journal of Psychology* 50 153-171 1960
- 上杉喬・佐々木正宏 カード式投影法による感情因子の基礎研究 『体験と意識に関する総合研究』 第1集 文教大学人間科学研究会 15-19 1979

- 上杉喬・佐々木正宏 「俳画的箱庭」における感情投影の基礎研究 — 試論 — 『体験と意識に関する総合研究』 第2集 文教大学人間科学研究会 95-99 1980
- 上杉喬・松尾春代 「図式的投影法」による家族認知の基礎研究 『体験と意識に関する総合研究』 第2集 文教大学人間科学研究会 100-104 1980
- 上杉喬・水島恵一 図式的投影法による学生の意識研究 『体験と意識に関する総合研究』 第3集 文教大学人間科学研究会 106-204 1981
- 上杉喬 感情イメージの研究 *人間科学研究* 第3号 22-38 1981
- 上杉喬 感情イメージの研究 (II) — 労働場面における感情イメージ — *人間科学研究* 第4号別冊 29-40 1983
- 上杉喬 感情イメージの研究 (III) — 労働場面における感情イメージの諸関連 — *人間科学研究* 第5号別冊 11-20 1984
- 上杉喬 感情イメージの研究 (IV) — 対象による違いと性による違い — *人間科学研究* 第11号 1-11 1989
- 上杉喬 感情イメージの研究 (V) — SD法による感情イメージの検討 — *人間科学研究* 第20号 68-77 1998
- 上杉喬・鈴木賢男 感情イメージの研究 (VI) — 感情価とパーソナリティ特性との関連 — *生活科学研究* 第22号 121-132 2000
- 水島恵一 実証的かつ実感的な体験研究の方法とテーマ — 「体験と意識」に関する個別・総合プロジェクトに向けて *文教大学紀要* 第12集 1-11 1978
- 水島恵一 「体験と意識」研究の方法論 『体験と意識に関する総合研究』 第1集 文教大学人間科学研究会 1-8 1979
- 水島恵一・上杉喬 編 イメージの基礎心理学 誠心書房 1983